

No.3013

「20 世紀前半の満洲都市の商業・生活空間の形成と変遷

一日・中・露の連携と競争を中心に」

九州大学人文科学研究院広人文学講座 講師

楊 昱 (YANG YU)

2019 年度に研究助成金「20 世紀前半の満洲都市の商業・生活空間の形成と変遷—日・中・露の連携と競争を中心に」を頂き、日本と中国の史料・現地調査を行う予定だったが、コロナにより、やむをえず日程と内容を延期、大幅変更することになった。

2021 年 8 月から 10 月まで、上海・長春・東京合計 53 日間のコロナ隔離を経て、中国東北地方での現地調査が実行できた。

研究調査期間は三年に亘り、段階的な調査結果によって研究計画を修正・発展しつつであり、予定通りに実施した部分、計画が達成しなかった部分、また予想せぬ新たな収穫もあり、今後の研究を導くことができた。

今回の文献・現地調査では、主に四点の発見を得た。第一、旧満洲の都市空間に関する中国語の（一次・二次）史料の収集ができ、先行研究を把握出来た。第二、文献調査で清末と民国期の長春の商埠地開発の政策とその実施の詳細を解明し、中国人市街(城内と商埠地)の空間構成とその発展を明らかにした。第三、現地調査から、戦前ロシア人・日本人・中国人市街の商業・生活空間は、戦後にも持続したことがわかった。それは、戦後の日本植民地建設の影響を論じるとき、重要な比較対象になる。第四、ハルビンの生活・商業空間は、二十世紀前半のヨーロッパまたユダヤ文化の影響が極めて深い。その研究は、越境する文化に関する新たな知見を提示する。

研究結果として、第 35 回国際美術史学会(CIHA,2019.9)で発表し、その論文を出版した(2021.9)。現地調査をまとめ、九州大学人文科学研究院講師の着任講義に発表した(2022.1)。また、文献・現地調査に得た発見を旧満洲都市空間に関する単著の第一章の修正稿に応用できた。

最後に、2021 年年末から、中国の厳しいコロナ政策により、上海・北京・長春・深圳をはじめ多くの都市が長時間ロックダウンされ、中国での調査はほぼ不可能になってしまった。このような現状の中、2021 年の現地調査の意義は極めて大きいと改めて認識している。